Japanese Association for Religious Studies

次に、『開目抄』『高橋入道殿御返事』『兄弟鈔』『報恩抄』『四条金吾殿御返事』によると、次のような認識が窺える。

一、日本と朝鮮三国との関係については、仁徳天皇代には三国は日本に朝貢するような関係であった。また百済は欽明天皇代に朝貢の際に仏教を伝えたのである。

二、朝鮮三国内の仏教事情については、法雲の影響で法華経信仰が浸透していなかった。

更に、『法門可被申様之事』『金吾殿御返事』『大果報御書』『別当御房御返事』『撰時抄』によると、

一、高麗の仏教事情については、禅宗と念仏宗の国になってしまっている。

二、高麗が蒙古の属国となった理由については、禅宗と念仏宗の国になったために、高麗国内の守護善神がいなくなったためである。

日蓮聖人の災害及び国難は、為政者及び国民が法華経を信仰していないために起こるとする立場からの見解である。実際に『法門可被申様之事』には高麗仏教を日本仏教の先師として認めているのである。（平成二二―二四年度科学研究費補助金基盤研究(C)「日本仏教各宗の新羅・高麗・李朝仏教認識に関する研究」による研究成果の一部）

日興とその門弟の往来に関する一考察

本間　俊文

日蓮の本弟子の一人で、日蓮滅後日興門流を形成した白蓮阿闍梨日興（一二四六―一三三三）には多数の自筆文書が伝来しており、その数は日蓮の直弟の中でも群を抜いている。日興文書の存在は、日蓮教団初期の動向や布教活動の様子、さらには鎌倉期における生活状況や文化の一端を紐解く貴重な文献史料であるといえよう。本発表では日興文書研究の一視点として、日興とその門弟の往来に関する記述に着目する。そして往来を伝える記述から、日興在世中にはどのような人の往来があり、その往来が日興らの布教活動とどのように結びつき、日興門流の教線拡張へとつながっていったかについて少しく考察したい。なお、本考察では日興文書に加え、日興在世中の筆と判断される日興の門弟の文書も考察対象とする。また日興文書・門弟文書には目的の異なった様々な往来が確認できるが、その中でも特に布教活動と諫暁活動を目的とした往来について考察する。

まず布教活動に関する往来についてである。日興在世中には門弟諸師が各地に赴いて教化活動を展開している様子が窺える。それは血縁関係者の本貫地という縁による日目の奥州教化や、日華・日郷・日妙の佐渡派遣による教化活動、そして日郷による安房教化などが挙げられる。このような各地における門弟の布教によって、日興門流の教線は着実に伸張し、日興門流の二大拠点である上野大石寺・重須本門寺のあった駿河からは遠く離れた奥州や佐渡にも多数の弟子檀越を獲得するに至った。その結果、毎年十月頃になると奥州信徒による大石寺登詣が実施されるようになり、地方における布教が功を奏して檀越による一つの慣習化した信仰活動を生み出したことが確認できる。また大石寺に登詣した奥州信徒は大石寺のみならず、当然

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

本門寺の日興の元へも赴いたであろう。十月の日付で書写し、かつ奥州信徒へ授与した日興の曼荼羅本尊は六幅確認できるが、これらは大石寺登詣した奥州信徒が日興の元を訪れた際に授与されたものではないかと考えられる。

次に諫暁活動に関する往来についてだが、日興在世中に諫暁活動を行った門弟としては日目・日仙・日順・日助・日妙の五名が確認できる。その内日目以外の四名については日興の代官として派遣されて諫暁活動を行った。またこれらの諫暁活動は公家・武家の両権力に対して行われており、断定はできないものの、日興門下が諫暁活動のために京都や鎌倉まで往来したことが想定される。

また、本考察を通して門弟の往来は多々確認できるものの、日興による往来を確認することはできなかった。日興は永仁六年（一二九八）に大石寺から本門寺に移住して以降、門弟教育機関である重須談所の開設や三〇〇幅超の曼荼羅本尊の書写、多数の遺文写本の作成、そして日蓮遺文の集成本『御筆集』作成への従事などの実績が伝えられる。これらのことから推測して、日興は本門寺に移住した後は、門弟の指導育成と曼荼羅本尊の書写、日蓮遺文の集成に専念したいという意志を移住前から持っていたのではないかと考える。その背景には、日蓮が身延入山後ほとんど身延の地を離れずに余生を過ごしたことがあったと考えられ、また日興が大石寺から本門寺へ移住したのは日蓮が身延に入山した時と同じ五三歳のことであって、日興も師日蓮の生涯に倣い、移住後は本門寺に止住して法華本門の思想を末代に弘め遺すための教化活動を行おうという意志が少なからずあったのではないだろうか。したがって日興の往来に関する記述が確認できないのは、単に史料不足によるものではなく、日興が意図的に本門寺に留まったからであったと考える。

以上の往来に関する考察から、初期日興門流における動向の一端を垣間見ることができる。

身延日意目録に関する一考察――書誌学的考察を中心に――

木村　中一

身延山久遠寺第十二世日意が記した「大聖人御筆目録」（以下、「日意目録」と略す）は、身延山久遠寺に恪護される日蓮遺文やその写本を記録した蔵書目録である。現在、この「日意目録」をみるには『昭和定本日蓮聖人遺文』（以下、「定本」と略す）第三巻に活字化され収録されている「日意目録」を引用するのが一般的である。

「日意目録」は、「御筆御書註文」と法量の異なる「台家聖教註文」の二種の蔵書目録が合冊され構成されている。「御筆御書註文」は「録内之分」・「録外之分御筆御書」・「録外御書註文日意所持分」と日蓮遺文を録内御書・録外御書に区別していることがわかる。またこの目録中に「法華和讃」の名前をみることができ、『日蓮宗事典』などにおいてこれが教団の記録に「法華和讃」が現れる嚆矢であるとしている。

この目録の筆者である日意は元天台宗の学僧であり天台教学を修学していた。この時期よりの所写本であろう天台系学書写本が現在も身延文庫に所蔵されており、それらであろう書物が次の「台家聖教註文」中、「台家聖教　日意所持分」・「宗要抄

NII-Electronic Library Service